



P2▶4

NAR運動 LCJE 日本支部

P5

シオンとの架け橋 石井田 直二

P6

アルコ・イリスミニストリーズ 早川 衛

P7

エンドタイム・ミニストリー 石田 吉男

P8

お知らせ 事務局より

巻頭言

神の報いを求めて



日本伝道隊理事長、塩屋キリスト教会牧師 三宅 弘之

私がまだイスラエルにいた当初（1996年）、パレスチナ人テロリストによる連続バス爆破事件や、市場やレストラン、大学の食堂など、爆弾テロが頻発していました。また、銃撃テロなども頻繁に起こっていました。そうした中で、日本のメディアが伝えていることをインターネットで見た時にあまりにも事実と異なるニュアンスでニュースが伝えられている事に驚かされました。

それを見て、現地にいるものとして、実際に何が起きているのか伝える義務があると感じ、小さな声にすぎませんが、個人的にニュースをまとめメール等を通して、知り合いに送らせていただいていた。ある方は、ホームページに掲載してくださるなどして、不特定多数の方の目に触れるようになっていきました。

ネットで、そうしたニュースがどのように受け止められているのだろうと検索をしたところ、非常に批判的に取り上げられているところもありました。日本で伝えられているメディアに慣れ親しみ、それが正しいと信じている人たちにとっては受け入れがたいものだったのでしょうか。

また、その頃からコンピューターウィルスが頻繁に送られるようになりました。ある時、そうしたウィルスに感染し、コンピューターの再インストールを余儀なくされました。しかし、再インストールをしてOSのアップデートをするためにネットにつないだ瞬間にウィルスにやられるという始末で、自宅ではどうにもならない状態でした。最終的には、イスラエル・トゥデイの事務所に行き、ネット環境が守られているところでやっとコンピューターの再インストールを終えることができました。

時にイスラエルのために働くことは、理解されなかったり、不利益を被ったりすることがあるかもしれません。また、信仰者としてまっすぐに歩もうとするときに理解されなかったり、不利益を被ることもあるかもしれません。

しかし、そうした中で、私たちが人からの報いやこの世間的な報いではなく、神からの報い、また神から与えられるところの報いを求める姿勢が重要であると言えます。

ネヘミヤ書の中でこのようにネヘミヤは言っています。**「私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。」**（ネヘミヤ5：19）

ある人は、このように報いを求めている姿勢に否定的な意見を持つ人もいます。しかし、ネヘミヤのこの姿勢こそ賞賛に値するものであると私は思います。なぜなら、彼の姿勢には行動を伴った一貫性があるからです。

ネヘミヤは貧しい同胞のためにお金や穀物を貸し与えていましたが、同胞の富める人たちが貧しい人たちにしている不当な扱いを見て、率先して負債を帳消しにし、他の者たちも倣うように勧告しました。また、ネヘミヤは総督としてユダの地にいた12年間、総督として当然受けるべき手当も受けませんでした。

そして、ユダヤ人の代表者たち150人と周りの国々から来た人々が来て彼の食卓に着いていました。ネヘミヤは、彼らのためにごちそうを振る舞い、自分自身は簡素な食事に甘んじていました。

それは、「私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。」との彼の神への祈りは、真実な祈りであったからです。彼は、この世の報いや、人からの報いを求めていませんでした。ただ一心に、神からの霊的な報いと神からの称賛を求めていたのです。

私たちも、ネヘミヤのように損得を考えず、一心に神の報いと神に喜ばれることを求める者でありたいと思います。また、その求めが、私たちの生き方になるようにと願います。

ティックーンの教理は何を教えているか (第2回)

スカット・デイビッド・コングリゲーション長老 シモン・アミット 翻訳：佐野剛史

本記事は、著名なメシアニックジュー指導者であるダン・ジャスターが代表を務める宣教団体「ティックーン」の教理を批判的に分析したものです。著者は、公開資料を引用しながら、ティックーンの思想的背景と最終的な目標、今話題になっている新使徒的宗教改革 (NAR) 運動との関係、ティックーンが推進する TJCII (Toward Jerusalem Council II: 第二エルサレム会議に向けて) 運動の背景にある考え方などを分析し、ティックーンという組織をよく吟味するように読者に呼びかけています。

この記事は、計6回の連載の第2回目です。なお、紙面の都合上、翻訳は一部を省略した抄訳となっています。

【これまでの内容】

ティックーンの教理を理解するには、まず背景にある考え方を知ることが大切です。前回は、「ティックーン」という名前の由来と、ティックーンが影響を受けた「現代のレストレーション主義」を紹介しました。今回はその続きです。

2.2 現代のレストレーション (回復) 主義【後半】

前の章で言及したビル・ハモンによると、回復のペースは時間と共に加速しています。「過去には、回復と次の回復までに何世紀もの期間が経過していたのに対して、今日の回復のペースは早く、数十年という単位で回復が起っています。近代では、特に20世紀に入ってから、聖霊のバプテスマ、異言、預言者と使徒職の回復と、加速度的なペースで次々に回復が起きています」と語ります。ビル・ハモンは、預言者の職は1980年代に回復し、使徒職は1990年代に回復したと記しています(この2つは同時に回復したと言う人々もいます)。さらに、現代のレストレーション運動の中では、回復のペースが加速している今、回復の最終目標である教会の一致が実現する最後の世代がすでに始まっているか、始まろうとしているという期待感が高まっています。この最後の世代の名称は各グループで違い、ヨシュア世代 (Joshua Generation)、顕現した神の子どもたち (Manifest Sons of God)、新人類 (New Breed)、ヨエルの軍隊 (Joel's Army) などと呼ばれています。

ティックーンは、以上のようなレストレーションの原則を固く保持しています。「私たちは、神は信者のからだの中で失われてきた真理と正しい慣習をすべて回復してくださいと信じています。教会は、時代によって前進と後退を繰り返してきました。いくつかの真理は、ある時代に強調され、次の時代になると失われ、後の時代になるとまた注目されるということがありました」。この発言の意味するところは、すべての真理が回復すれば、終わりの時代の教会は使徒の働きのような、真理と霊的な力に満ちた教会になるということです。また、ダン・ジャスターとアシェル・イントレーターが、回復する必要がある働きのリスト

に新しい要素を付け加えていることについてもこれから見ていきます。その中で最も重要なのが、使徒15章に登場するようなユダヤ人使徒の最高会議という形で、世界中の教会に対する霊的権威を回復することの必要性です。ティックーンによると、使徒会議も、メシアニックジューと全世界のキリストのからだに対する霊的権威も、教会が初期の頃のような働きをするためには回復する必要がありますものだとします。以上のようなことを見ていくと、事実上、ティックーンの教理は従来からあるレストレーションの原則の延長線上にあるもので、イスラエルの使徒たちによる拡大版とすることができます。

ただ、ジャスターは、最終的な目標は単に使徒時代の教会の水準に回復することではなく、世界規模で、初代教会を超える水準にまで回復することだと語ります。また、使徒3:21の「万物の改まる」という言葉には「回復」よりもはるかに強い意味があると主張します。使徒の働きの時代にあったものよりもはるかにスケールが大きく、その時代にはなかったものが来ることをほめめかす「完成」という意味があるとします。「エペソ4:11～16を見てください。私たちは、1世紀のキリストのからだだが完璧な教会という目標を達成したが、それ以降は墮落してしまったかのように、ただ回復を求めているだけではありません(ただ、新約聖書の教会は非常に高い水準に達していました)。実際に私たちが求めているのは、世界的規模で、もっと優れたもので、使徒2～4章に記されている教会のようであり、しかも全体がもっと完成されたものです。私たちは、まだ地上に現れたことがない完全なものを求めているのです」(ジャスター『Apostolic Ministry and Authority (使徒の宣教と権威)』P. 23)。このような、終わりの時代に回復した教会は、使徒の時代の初代教会を質的にしのぐものになるという教えが、現代のレストレーション運動の中心的な教えです。

イントレーターは、最後の世代は使徒の働きが回復した時代になるとし、その世代はすでに始まっているか、今にも始まろうとしているという期待感を持っています。また、この時代に戻るように主は自分を召してくださった

と語り、この世代は約 40 年（一世代）続くといます。イントレーターは、インターネットから入手できる「New Age of Acts of the Apostles (新しい使徒の働きの時代)」という記事で、次のように書いています。

「2017 年の変わり目に、ブラジルのカンファレンスで祈っていた時のことです。その時私は、『新しい使徒の働きの時代に戻りなさい』と主の御霊が語りかけてくださっていると感じました。(中略)私たちは、何十年もの間、宣教の「型」を求めて「使徒の働き」を読んできました。(中略)ほとんどのレストレーション主義の宣教団体は、使徒の働きを宣教活動のモデルとして見えています。しかし、私は「新しい使徒の働きの時代に戻る」という言葉をまったく違った意味にとらえました。1 コリント 10:11 に「**世の終わり (end of ages) に臨んでいる私たち**」と記されているように、これは単なる「型 (pattern)」ではなく「時代 (age)」なのです。

最初の使徒の時代は、イエシュアが地上から天に上った直後に来ました。私たちは、イエシュアが天から地上に下ってくる直前の時代に生きています。この 2 つの時代に共通する特徴は、国際的なエクレスシア（教会）とイスラエルのメシアニックジューの共同体が共存していることです。西暦 33 年以前にエクレスシアはありませんでした。紀元 70 年以降は、イスラエルがありませんでした（その間約 40 年）。**この一世代の間、エクレスシアとレムナント（ユダヤ人信者）は共存していました。そして 2 千年ぶりに、両者の共存が再び実現したのです**（中略）

現在私たちに与えられている期間を正確に数える方法はわかりません。西暦 2000 年に始まり、2040 年に終わるのでしょうか（40 年間）。それとも、2017 年に始めて、この世代のいつの時点かに終わるのでしょうか。私にはわかりません。

しかし、使徒の働きのような状況が出現する条件は、歴史上かつてないほどにそろってきています。

2017 年は、使徒の働きと黙示録の預言の成就によって、『再出発』を切る画期的な年になります

結論として、ティックーンの使徒たちは、レストレーションの原則を支持しつつ、それに加えて回復しなければならぬ真理と働きを追加していると言うことができます。また、最後の世代は、最初の使徒の世代には到達することができなかつた「完成」をもたらすとも主張します。ティックーンは、メシア的回復を聖書的、歴史的なスケールで定義し、回復した使徒の時代はすぐそこに来ている、あるいはすでに始まっていると信じています。それに劣らず重要な点は、ティックーンの使徒が、自分たちは最後の世

代に神の使徒として奉仕するように神から召されていると考えていることです。

2.3 後の雨運動

ジャスターは、後の雨運動のリバイバルがイスラエル国家の樹立と並行して起こったと記し、教会とイスラエル国家の回復が同時進行することを教える預言的なマイルストーン（節目）になったとしています。ジャスターは著書でこのように記しています。「**1940 年代に後の雨運動が起こるまで、使徒と預言者の回復がメシアの再臨前にメシアのからだは回復し、完成するための鍵だと強調されたことはありませんでした**。その主な根拠になった聖句が、エペソ 4:11 です」（ジャスター『Apostolic Ministry and Authority』P. 48）。

後の雨のリバイバルは、1948 年にカナダのサスカチュワン州で始まり、1952 年まで続きました。多くの指導者や学生がウィリアム・ブランハムの教えに影響され、霊的刷新に自分自身を捧げる必要があると奮い立ちました。このリバイバルの中心聖句は、ヨエル 2:23 です。「シオンの子らよ。あなたがたの神、【主】にあって、楽しみ喜べ。主は、あなたがたを義とするために、初めの雨を賜り、大雨を降らせ、前のように、初めの雨と後の雨とを降らせてくださるからだ」。この人々は、初めの雨は使徒の働きに記されている聖霊の傾注（注ぎ）の型であり、後の雨は神が終わりの時代にもたらしてくださる聖霊の傾注の型であると主張しました。また、初めの雨で使徒の宣教が行われ、聖霊が注がれ、その結果人々が悔い改めたのであれば、後の雨でも同じことが、さらに大きなスケールで実現すると語りました。イントレーターも、この点で後の雨と同じ解釈に立っています。

後の雨運動は多くの教理を生み出し、その影響は今日まで続いています。顕現した神の子どもたち、ヨエルの軍隊、五役者の働き (Five-Fold Ministry)、終わりの時代に教会が回復することがメシア再臨の条件であるとする教えは、後の雨運動から出たものです。後の雨のリバイバルと運動は衰退しましたが、教理は生きながらえ、現在もキリスト教の一部グループ、特に現代のレストレーション運動の中で影響を与え続けています。ティックーンは後の雨の教理をすべて受け入れているわけではありませんが、先ほど引用したジャスターの発言からわかるように、その他の現代のレストレーション運動と同様に、直接的な影響を受けています。

1949 年に、アメリカのペンテコステ派最大のネットワークであるアッセンブリー教団 (Assemblies of God) は、後の雨運動の教理を全面的に批判し、「同じ尊い信仰を

持つ人々の交わりを断ち切る結果にしかならず、キリストのからだの中で混乱や分裂を起こす傾向がある」と宣言しました（「Minutes and Constitution, Assemblies of God (議事録と規約、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団)」1949年、26ページ）。特にアッセンブリー教団は、「教会は現代の使徒と預言者の土台の上には立っていると主張する誤った教え」を非難しました。

聖書は、神の子どもたちの栄光は主の来臨と共に現れると教えています（ローマ 8:19、ユダ 14、ゼカリヤ 14:5、1テサロニケ 4:14 など）。神の子どもたちが栄光のうちに現れると言われているのは、死からよみがえり、栄光の体を受け、メシアとつながるからです。ところが、後の雨の運動から生まれた「顕現した神の子どもたち」という教理では、神の子どもたちの栄光は、教会の最後の世代に、メシアが来られる前に現れると教えられています。この運動では、イエシュアが戻ってこられる前に、教会の最後の世代は超自然的な栄光の体で地上を歩くことになるかと教えられているのです。

ジャスターは、栄光の現れは2度あると考えています。1度目は主の再臨の前、2度目は再臨の時です。一方は教会の一致という栄光の現れであり、もう一方は復活という栄光の現れです。まず、教会の一致が最後の世代に完成する時に栄光が現れます。次に、メシアが再臨し、信者が新しい栄光の体を受ける時に栄光が現れます。ジャスターは、主の再臨前に現れる栄光は復活の体のことであるという後の雨の立場を否定しますが、主の再臨の前に現れる栄光を待ち望みながら生きる必要があると言います。「復活が起こる前に、私たちが顕現した神の子どもにならないとしたら、復活の体で地上を歩き回らないとしたら、あとは**イエシュアが来られてすべてを成就するのを待つだけになるのでしょうか。いいえ、それも間違いです。イエシュアが祈られたような一致と現れが、復活の手前で実現するという次元があるのです。それが、携拳と栄光の体に至るために必要なステップなのです。『彼らがみな一つとなるためです…わたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください』。これが、神の子どもたちの顕現なのです。『またわたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです』(ヨハネ 17:22)」（『Israel, the Church and The Last Days』P. 77-78）**

2.4 新使徒的宗教改革 (NAR)

1990年代の初め、当時米国のフラー神学校の教授であったピーター・ワーグナーは「教会成長」をテーマとして研究し、使徒的運動に参加している教会はほかのどのような運動に参加している教会よりも急速に成長している

ことに気付きました。その時代に、使徒的運動は特にアフリカ、南アメリカ、そしてアジアの広範な地域で成長していました。ワーグナーは、研究していた使徒的刷新の時代に新しい名前を付けます。それが「新使徒的宗教改革」(NAR: New Apostolic Reformation) です。

「教会の一部では、過去2千年間を通して使徒職が認められてきました。ローマカトリック教会、英国国教会（聖公会）、また「使徒」という名前を肩書きに取り入れているその他の多くの教団教派が例として思い浮かびます。しかし、預言運動と同じく、こうした使徒的運動を強調する動きは、キリスト教宣教の最前線でいのちを与えている福音派教会の主流派にまでは浸透していませんでした。これが現実に関わり始めたのが1990年代になってからです」（ピーター・ワーグナー『Apostles and Prophets - The Foundation of the Church (使徒と預言者 — 教会の土台)』P.19-20)。

現在キリスト教福音派が直面している変化は、使徒と預言者が認められてこなかった2千年間の後に起きている、終わりの時代の新使徒的宗教改革にほかならないとワーグナーは言います。「NARは、プロテスタントの宗教改革以降で最も根本的な変化を教会にもたらすものです」。

ピーター・ワーグナーは、自分がしたことは、さまざまな流れのキリスト教会にすでに存在していた現象を見つけ出し、定義しただけだと主張し、NARの父と呼ばれることを拒みました。ワーグナーは、自分はただこの改革を「知的に見出した父」というだけだと主張したのです。しかし実際には、ワーグナーは新使徒的宗教改革の中心的な思想家、神学者、霊的指導者でした。多くの書籍と記事を出版し、使徒的運動の主要な組織である国際使徒連合(ICA: International Coalition of Apostles。後に「使徒的指導者の国際同盟」(ICAL: International Coalition of Apostolic Leaders)に改称)のトップを長年務めました。ワーグナーの出版物は、使徒的運動の権威の源泉にもなりました。

ピーター・ワーグナーは、使徒のことを「神の訓練と教育を受け、神に立てられた信仰ある指導者で、神の国を推進する目的のために、宣教の特定領域に教会の土台となる統治組織を据える権威を持っており、その働きを、聖霊が諸教会に語りかけることばに耳を傾け、そのことばに沿った秩序をもたらすことによって実現する者」(ICALのウェブサイトより)と定義しています。つまり、ワーグナーの定義によると、使徒職とは権威と統治(ガバナンス)に関わる職だということになります。ここが重要なポイントです。この教えが、ワーグナーの使徒に関する教理の土台となっており、イスラエルのティックーンの使徒が教える教理の根本原則となっているためです。(続く)



イスラエルの重要性を学ぶ(1) 人間創造の多様性

シオンとの架け橋 石井田 直二

聖書研究会で行われた12回シリーズの学び「イスラエルの重要性を学ぶ」から要約をご紹介します。今回の聖書箇所は創世記1:26～27です。

現代のキリスト教では、すべての人は福音に関して完全に「平等」だと考えます。ですから、特定の民族であるイスラエルが、何か特別な使命を持つという考えは「反則」に見えるのです。

しかし、平等思想が新しい「イデオロギー」であることに注意しなければなりません。人は生まれながらに違います。誰から生まれるかによって、持って生まれたDNAが違う上に、相続する財産も違うので、人生が全く違ったものになります。クリスチャンの両親から生まれた日本人が福音の恵みにあずかる確率は100%ではありませんが、一般の日本人に比べて格段に高いことは論を待たないでしょう。

■多様性は神の指紋

よく見ると、神は人をみな同じようには創造しておられません。神の作品はすべてが独特です。水辺にある石は、みな形も重さも違います。落ち葉でさえも、2つとして同じものはありません。工業製品は、見分けるのが難しいくらいによく似ていて、全て等価ですが、命はそれぞれが独特です。多様性は、神の作品の特徴なのです。

そこで、今日の聖書箇所を考えてみましょう。神は人を「自分のかたち」に創造されました。神は唯一なのに、その「かたち」である人は男と女の2種類だったのです。

神はそんなややこしいことをされたのでしょうか。それは、創世記1:26に書かれたように、被造物を「治めさせる」ためだと思われます。創世記2章では、エデンの園を「耕して守る」という使命人に与えられ、それから人の「助け手」として女が作られます。つまり、異なる能力を持つ男女が協力しなければ、ミッションを果たせないと、神はお考えになったのでしょうか。それは男女に限ったことではありません。異なる能力を持つ人が協力するのは、ビジネスの世界における成功パターンの一つです。本田宗一郎と藤沢武夫など、そのような例は枚挙にいとまがありません。

■バベルの塔に隠された鍵

人々が協力すると、驚くべき力を発揮します。洪水の後でバベルの塔を建てた時、人は「一つ」（創世記11:6）でした。これほどの巨大プロジェクトですから、

建築工学を理解した設計者、煉瓦や瀝青など素材の専門家、労働者をまとめる現場監督たち、そして、塔の建設目的を人々に語ってまとめるリーダーがいたはずでした。工事が始まると、神は「彼らがしようとするのは、もはや何事もとどめ得ない」と言われました。ちっぽけですぐ死んでしまう人間ですが、異なる能力を持つ人々が心を一つにすると、神でさえも容易に止められないほど力があるのです。

そこで、バベルの塔の後で神は民族を分けられました。それは一種の「罰」ではありましたが、そこには全人類を神の元に帰らせる計画もまた隠されていました。人を異なる時代や民族の中に置かれたのは、「神を見出す」ためだと使徒17:26には書かれています。ただし、これはパウロがギリシヤ的思考方式に合わせて行った説明であり、本来は「神が人を見出す」と言うべきところでしょう。

■民族の使命とイスラエルの使命

民族がそれぞれ異なる性質を持つことは、実際に付き合ってみればよくわかります。文化も行動様式も全く違うのです。そして、民族によって福音宣教の進展が全く違うことも、ご存じのとおりです。欧米人が福音を受入れたのは、彼らが優れていたからでしょうか。日本人が福音を受入れないのは、頭が悪いからでしょうか。そうではありません。福音は恵みであって、すべては神の選びなのです。

神の不思議なご計画によって、欧米人は先に福音を受入れる恵みを得た代わりに、莫大な代価を払ってその福音を全世界に広げるミッションを与えられました。そう考えると、イスラエルという特定の民族が、神に選ばれて用いられたのは、決して「例外」でも「反則」でもないことがわかります。

本紙読者の皆さんが、日本人として生まれ、数少ないクリスチャンとして選ばれ、その中でイスラエルに目が開かれているのは、頭が良かったからではなく、ただ「選び」なのです。そして恵みは、ミッションをも伴っています。そう考えると、小さくて力が無く、頑固であるにもかかわらず、世界救済のミッションを託されたイスラエルの気持ちが、多少とも理解できるのではないのでしょうか。



「収穫」のために働いているか？

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表 早川 衛

LCJE ニュースには、2019年5月号から「ティックーンの教理は何を教えているか」という文章が掲載されている。取り扱われているテーマは「新使徒的宗教改革/New Apostolic Reformation」(以下、NARとする)であり、「使徒職の回復」、「終わりの時代の回復」、ティックーンが提唱する「第二エルサレム会議」等に関する批評である。

この掲載が始まる前に、筆者はNARを批評する他の本を読んでいた。その中には、中米グアテマラ国のアルモロンガという小さな町や南米コロンビアのカリ市で起こった霊的ムーブメントとNARとの関係を示す箇所がある。同内容に関し、筆者は、実際に同地を訪ね、教会関係者にインタビューした経験を有する者として、違和感を禁じ得ない。それは、事実とその本に書かれた事柄とは異なる、と思われる一例である。

筆者は、このような形で表面化したNAR問題を適切かつ中立的に考察し、祈る必要を感じる。キリストのからだである教会が持てるものを単なる批評や批判のためではなく、「収穫」のために用いる必要があると思料するからだ。

人間は、議論や批評に接する時、問題視される側のものを全否定することがある。真理が含まれていても十把一絡げ的にすべてを排除してしまうのだ。「第二エルサレム会議」の目的には、カトリック、東方正教、プロテスタント教会が、ユダヤ人に対し今まで犯した過ちを悔い改めることが含まれる。勿論、「パン種」を処理することをなおざりにすることはできないが、悔い改め自体は必要なことだ。

簡単に書くなら、NARは使徒職の回復を肯定し、聖霊の賜物や聖霊の働きを認める。そして、NARを批評する人々は、それらを否定する、あるいは、否定する傾向がある。この点に関しては、もう一度、新約聖書を読み、中立的かつ鳥瞰図的に理解する必要があると思料する。

終わりの時代に起こる回復についても同様である。NARが根拠とする聖句(例えば、使徒の働き3章19～21節等)を「神学」や「今までの教え」を抜きにして、もう一度読んでみよう。

いずれにしても、NARの意見や主張を直接、聴く必要があると思料する。本年2月に開催された日本ペンテコステ親交会のカンファレンスにはNAR関係者が講師として招かれた。その中の一人、ウェイン・ウィル

クス師が「イスラエルに関しては情報が錯綜している。SNSの影響もありカオス状態だ。実際に会うメシアニック・ジューや彼らを支援する人たちからの情報を大切にしたい。」と発言した記録がある。双方から直接聴くこと無しに、一方の批評だけに耳を傾け、判断することは、賢明な対応ではない。それは、キリストのからだに新たな分裂を引き起こすものである。

また、世の終わりの時代のプログラムについて書かれた聖句解釈の困難さを認めるべきであると思料する。これらの聖句は、山脈のようである、と教えられたことがある。山脈は遠くから見ると大きな一つの山のように見える。しかし、近くに寄るなら、山脈は複数の山からなるものであることが分かる。世の終わりの時代のプログラムもこれと似ており、遠くから見ていただけでは全容を理解することはできない。その時が近づかなければ、詳細を把握できない事柄もあるのではないだろうか。

例えば、イザヤ書の11章には、イエスの初臨と再臨が描かれていると思料する。これらは、同一の章に記されているため、あたかも同時期に起こる事柄のように読むこともできる。しかし、イエスの初臨を経験し、それを信じる者たちは、イザヤ書11章の預言の半分が、まだ成就していないことを悟れるはずだ。すなわち、イエスの再臨がまだ起こっていないことや千年王国は、まだ来ていないことを理解するはずである。NARを肯定する人々と否定する人々が、このように世の終わりの時代のプログラムについて書かれた聖句解釈の困難さを認めなければ、健全で正しい議論は成り立たないであろう。いずれにせよ、誰であっても他者の意見とその根拠とされるものに直接耳を傾けるべきである。

イエスは、毒麦の例えを話された(マタイの福音書13章24～30節)。それによれば、毒麦を抜き集めることは、キリストのからだである教会の働きではない。それと同じように批評や批判は、教会の働きではないのではないか。主が教会に与えた良きものは、「収穫」のために用いるべきだ。キリストのからだは「収穫」のためにエネルギーを注ぐべきであると思料する。

キリストのからだである教会が、「収穫」のために働いているかを絶えず熟慮しよう。そして、教会が、何事においても偏った考え方で満ちないように。議論が正しく行なわれるため、批判する人々の主張だけが展開されないように。批評や批判することが目的とならないように。そのためにのみエネルギーが注がれないように。キリストのからだだが、持てるものを「収穫」のために使えるよう祈ろうではないか。



ロシア・サハリン宣教への挑戦

キリスト聖協団札幌教会・オリーブチャペル牧師 石田 吉男

「神の時を認識する」

あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。ローマ人への手紙 13 章 11-12 節

聖書には、いつの時代にも神に仕える忠実な聖徒が必ず起こされ、彼らの信仰と祈りと従いによって神の国の福音が広がり、神のご計画実現していった状況が記録されています。そのような神のご計画に従った人々のことを、ルカ伝では「みことばに仕える者となった人々」と表現しています。この「みことばに仕える人々」によって進んでいったのが、イスラエル教会の歴史です。

彼らはどのようにして「みことばに仕える人々」へ変えられたのでしょうか。彼らの歩みは、いったい何を根拠としているのでしょうか。

1 神の時を認識する信仰

ギリシャ語には「時」を表す2つの言葉があります。一つは「クロノス」で、1分1秒を刻みながら進行し続ける時間。もう一つは「カイロス」で、定められたあるひと時の事であり、「神の時」を示す意味でも使用されています。

冒頭の聖句にある「今がどのような時か知っているのですから」の「時」にも、この「カイロス」が使用されています。パウロは、ローマのクリスチャン達に向けて、神が計画してお定めになった重大な局面、すなわちキリストの再臨の時が迫っていることを語り、神の時を認識させることで彼らの信仰を眠りから覚まそうとしたのです。

ルカ伝では、その時代を見分けることができない人々の事を「偽善者」と呼んでいます。ルカ 12 章 56 節

また、初代教会のクリスチャンの中にも、「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままでないか。」2ペテロ 3 章 4 節

と考える人々がいたことが記されています。

神の時を認識できない信仰は眠ったもの、無感覚、無軌道、無責任なものとなります。「あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」黙示録 3 章 1 節

とあるように、眠った信仰は、死を招く危険な状態に陥ってしまうのです。

マタイ 24 章とそのその並行記事であるマルコ 13 章、ルカ 21 章では、イエス様が弟子たちに「神が計画し、お決めになった時であるキリストの再臨」と「その前兆」について、認識を持つよう勧めています。①偽キリストの出現 ②戦争や暴動 ③民族や国同士の対立 ④大地震 ⑤疫病 ⑥ききん ⑦迫害 ⑧人間同士の愛の冷え ⑨全世界への福音伝道

これらの後には終わりが来る、と教えられたのです。「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」マタイ 24 章 8 節

赤ん坊が誕生するときには出産の痛みが伴うように、神の計画により決定した時に入ると、神の御国の到来に向けて生みの痛みが増す段階に入っているのです。

2018 年、様々な自然災害が日本を襲いました。「豪雨」によって各地が大洪水や浸水に見舞われました。風速 58 メートルを記録する「台風」によって甚大な被害もたらされました。6-8 月かつて長さで「猛暑」が続き、41、4 度 C を記録。「地震」もまた、大阪北部、島根県西部、北海道胆振中東部と各地で発生しました。

一方、全世界では「火による災害」が相次ぎました。アメリカのカリフォルニア州、テキサス州、フロリダ州で大規模な森林火災が発生したほか、カナダ、メキシコ、ナイジェリア、ギリシャでもやはり森林火災が起きました。スウェーデンで起きた森林火災では通常の消化活動が全く功を奏さず、空軍の戦闘機による「爆撃」でようやく鎮火したとのことです。ロシアのシベリアや極東等、これまで山火事とは無縁だった地域で、気候変動により大規模な森林火災が発生しました。

こうした火災の影響もあってか、「二酸化炭素」の世界全体での年間排出量は 392 億トンに達し、これまで地球を守ってきたオゾン層が破壊されて温暖化現象が急激に進行。異常な猛暑と乾燥のため、北半球の気温は平年よりも 10℃—15℃上昇し、最高気温が 51℃を記録した地域もありました。森林火災で 1 年間に 34 万人の生命が失われ、4000 万人が大気中の有害物質を吸い込んで肺を侵されて呼吸障害となり、肺がんの発生率が高まるという事態にまで発展しています。このような自然災害は、私たち人類を愛するがゆえの「目覚めなさい」という神の促しであり、警告ではないでしょうか。

今後世界では私たちの想像をはるかに超える出来事が起こることを、聖書は記しています。

「そして、日と月と星には、前兆が現われ、地上では、諸国の民が、海と波が荒れどよめくために不安に陥って悩み、人々は、その住むすべての所を襲おうとしていることを予想して、恐ろしさのあまり気を失います。天の万象が揺り動かされるからです。

そのとき、人々は、人の子が力と輝かしい栄光を帯びて雲に乗って来るのを見るのです。

これらのことが起こり始めたなら、からだをまっすくにし、頭を上へ上げなさい。贖いが近づいたのです。ルカ 21 章 25-28 節」

終末の時代に生かされているクリスチャンとして、神の時に聖霊によって認識し、目を覚まし、キリストの再臨を祈りつつ神にお仕えしていきましょう。

次月号「週末の日時計・イスラエル」へ続く

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断していただきますよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	7月	8月	9月	会 場
大阪(6:30より)	11日	8日	12日	北浜スクエア(VIP関西センター8F)
東京(1:30より)	13日	10日	14日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】第二木曜日午後6時半開始です。会場はVIP関西センター8Fです。

【東京祈りにご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈りの会場は、811号室ですが、変更される場合があります。階下の掲示板をご覧ください。

5月号に掲載した「ティックーンの教理は何を教えているか」について

◇読者の皆様へ

5月号に掲載した「ティックーンの教理は何を教えているか」は、LCJE日本支部運営委員会メンバー内での十分な話し合いや、十分な事実関係の確認のないまま、ある個人から提供された情報を、コーディネーターのチャールズ・クリンゲンスミス氏の独断で掲載したものです。これについて、去る5月17日に行われたLCJE日本支部運営委員会において対応が協議され、以下のことが確認されました。

- 1) この文書は、実際は、説明文にあるような「調査委員会が出した第一段階の調査報告」ではなく、シモン・アミット氏個人作成の文書であることが掲載後に分かった。ただ、この文書は、イスラエル全国のメシアニックジャーナル編集者が集まる公式会合で取り上げられ、この文書を元に調査が始められることになった。
- 2) この文書に対しては、すでにティックーン側から昨年8月に応答文書が提出されている。その後も多くのやりとりがあって、今年5月末には調査委員会とティッ

クーンの本格的な話し合いが始まること分かった。

- 3) 一方的な批判文書に掲載したことについて、コーディネーターがティックーン・ジャパン・パートナーシップ(世話人: スティーブン・ケイラー師/行澤一人師)の関係者にお詫びする。(協議後、即日に謝罪の連絡を行った。)
- 4) 今後ティックーン側の主張等も、LCJEニュースに掲載していく。掲載スケジュールは、アミット氏の文書を5~7月号に(掲載しきれない分はウェブサイトで公開)、それに対するティックーン側の応答等を7~9月号に掲載する。また、もう少し詳しい経緯等についてもLCJE日本支部で確認し、それを8月号に掲載する。

今回の件が、日本のクリスチャンの中で対立ではなく、相互理解と一致をもたらすようにと、LCJE日本支部運営委員会メンバー一同、心から祈るものであります。

LCJE日本支部運営委員会

LCJE日本支部2019年4月度会計

収入・献金		支出・現金	
科 目	金 額	科 目	金 額
献 金	214,600	事 務 費	12,800
大阪祈り会席上献金	20,000	NEWSレター製作費	50,120
		郵 送 費	42,000
		郵便振替手数料	4,150
		通 信 費	5,500
		賃 借 ・ 管 理 費	21,600
		謝 儀	50,000
		高 熱 費 ・ 共 益 費	9,400
		交 通 旅 費	7,000
		祈 り 会 経 費	4,000
合 計	234,600	合 計	206,170
		差 引 残 高	28,430
前月よりの繰越	121,737	翌月への繰越	150,167

事務局よりのお知らせ

LCJE日本支部では、皆様からの声、そして証や、記事の御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いづれも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEPJAPAN@HOTMAIL.COM 又は [FAX 072-867-6721](tel:072-867-6721) まで。宜しくお願い致します。

編集後記

コ・ワーカーの皆様お元気にお過ごしでしょうか。今月も興味深い内容のニュースレターをお手元へ届けられる幸いを主に感謝いたします。

6月もイスラエルを含む中東情勢から目が離せない「時」であること、編集集中にも本当に祈られました。是非「ロシア」・「トルコ」・「シリア」・「中国」の政治家たちに「主に対する畏怖の念」を祈りの力で起こさせ、イスラエルへの迫害・暴力を止めてくださいますようご加禱くださいます様に。今月も、まだ主とお会いしてないユダヤ人には一日も早く主とお会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席くださり、イスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカー一人一人に主の祝福がありますように。シャローム LCJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝